

西尾実の教養論と教材論

武 藤 清 吾

1. はじめに

20世紀前半の国語教科書には「読本」という名称が与えられてきた。教科書は、教育の主要な教材の一つである。このことは、「読本」という教材に収められた文学作品を「読む」という国語教育が行われてきたことを示している。のちに教養を担った人々も青年期に「読む」教育を受けて巣立った。「読本」を「読む」ことで獲得した知識を基盤にして教養を形成したのである。

「読む」ことが中心になれば、知識の獲得よりも身体的修練が必要となる教育活動は疎かになる。たとえば、演劇、映画、口演、弁論の技術や方法を体得させる教育実践は作品を「読む」だけでは成立しない。音声の発生方法や観客、聴衆への伝達技術、記録の仕方や再生の方法などは知識も必要であるが、技術的身体的鍛錬が必須である。また、演劇の脚本や口演の原稿の創作、添削なども、書くという身体的鍛錬が必要である。与えられた文字情報の解釈だけでは、具体的な実践現場での豊かな営みを生み出すための自由な発想や想像力は生まれてこないのである。

「読む」ことを中心にして教養を形成した人たちが、これらの自由な発想や想像力よりも定式化された教養に依拠しがちであったことは、「読本」中心の国語教育で学んできたという歴史的事情によっている。教養という概念が本来的に含有していた自由や想像力に着目する機会が閉ざされ、その土壌をも剥落させることとなった。その結果、「読む」ことで獲得した知

識偏重の日本型教養概念を形成していったのである。20世紀後半も、日本経済の高度成長を支える実用知識の獲得が重視された。知識を正しく読み活用するために読解が求められた。そして国語教育でも「読む」ことの意義が語られ、教科書も引き続き「読む」ための教材を中心に編集発行された。教科書採択でも、収録作家や評論家の作品の知名度や普遍性が基準とされる傾向にあった。こうして教養概念はさらに歪んでいくことになる。

西尾実（1889～1979）は、20世紀前半の国語教育と青年期教養形成が孕んだ教養概念の歪みに気づいた数少ない国語教育学者のうちの一人であった。本論では、西尾実の教養論を見ることで、彼がいかに当時の教養の歪みを認識していったかを考えたい。また、西尾実が中心となって編集した旧制中学校国語漢文科用教科書『国語』⁽¹⁾刊行の状況を見ることで、具体的な教材編集の場面で彼の教養論がどのように育まれていったかを考察する。『国語』は、日本の中等国語教育史上初めて「読本」という名称を使用せず「国語」と単独表記をした教科書である。西尾実が「読本」という名称を退けた理由は、彼の最初の著作である『国語国文の教育』⁽²⁾に明瞭に表れている。

本論の目的は、国語教育学の分野で日本型教養がどのように位置づいてきたかを考察する一環として、西尾実の教養論と教材論を考察することである。修養から教養へと変移していった日本型教養形成の文脈に西尾実の教養論を置いたとき、彼の所論の持つ独自性がどのように映るかを考察する。

筒井清忠『日本型「教養」の運命』⁽³⁾は、近代日本のエリート文化の中核的エートスとしての教養主義が明治後期の修養主義から離脱して独自の位置を占めるに至る諸相を克明に分析した。『国語国文の教育』や『国語』を生み出した西尾実の実践の舞台は、高等女学校や中学校という旧制中等教育学校であった。これらの学校は、法制度上も文化的にも旧制高等学校と直接間接に深い接続関係にあった。旧制高等学校は、近代日本学歴エリート文化の象徴的存在である。ここから日本の教養主義が誕生していった。

西尾実の教養論は、こうした制度的、文化的文脈に位置づくことになる。

本論は、日本型教養形成の基盤が、20世紀前半の国語教育やその周辺の文化構造の中でどのように生成され発展させられてきたかについて考察する基礎資料となる意義を有している。

2. 『国語国文の教育』の意義

西尾の教養論を見るうえで不可欠な文献は、『国語国文の教育』所収の「国文学と教養」である。『国語国文の教育』は、西尾実による最初の著作であり、彼の研究の出発点をなしている。目次は以下のとおりである。

- 一 方法体系
 - 一 行的方法
 - 二 基礎経験
 - 三 読む力の基礎
 - 四 読む作用の体系
 - (一) 素読
 - (二) 解釈
 - (三) 批評
- 二 文学形象の問題
 - 一 文学形象の概念
 - 二 文の主題とその展開
 - (一) 主題と構想
 - (二) 叙述
- 三 国語の愛護
- 四 国文学と教養
- 五 国語教育者

『国語国文の教育』の大きな特徴点は、国語教育実践方法論を理論として体系化したことにある。本書は、西尾を始めとした国語教育者たちの教育実践を踏まえ、その実践の依って立つ論拠を明確にする目的で書かれて

いる。

西尾は、本書の「序」で、「私がこの十数年来従事し来たった国文学研究と国語教授の体験から、自己の方法を省察し、これによって国語教育の立場を確立しようとした一の試図にすぎない」と述べている。

この発言の持つ意味については、『国語国文の教育』の成立経過がよく示している。石井庄司は、『国語国文の教育』の原形が、毎月配本された『国文学講座』の連載「国語教育の諸問題」であることを『西尾実国語教育全集』第十巻の年譜を根拠に示している⁽⁴⁾。そして、この『国文学講座』が当時⁽⁵⁾の中等教員検定試験（文検）受験者対象の講座であること、石井自身も毎月の配本を楽しみにしていたことを述べている。さらに、石井は次のように回想している。

執筆者は、ほとんど京都大学国語国文学の先生がたや先輩たちであった。はじめて名を知った成蹊高等女学校専攻科教授西尾実先生述とある『国語教育の諸問題』が、たいへんおもしろかった。とくに「素読」についての新しい提言には、大いに感動した。

石井の証言と回想は、『国語国文の教育』が、単なる学説紹介や研究報告ではなく国語教育実践の理論化を図る画期的な書物であったことを教えている。

『国語国文の教育』の「序」では、本書の全体構想が、「主として教授方法を始め、教材研究、学習心理研究または教育測定のごとき、既に実現され展開された作用の方面について」の研究を超えて「更に深くそれらを成立させ基礎づけるべき、より有力な立場の確立」を目指していることを述べている。

その上で「かつては、一学究としてまた一教師として、泰西の学風を仰慕し、あくまでその基調たる合理的自由思想的立場によって「あるべき生活」を求めようとした」が、「人生における、また教育における経験を重ね

るに従って、そういう根本的な要求は、かえって古い東洋的な行き方によって充たされるものであることを思うようになって来た」と述懐している。そして、その考察の結果辿りついたのは次のことであった。

私が一個の人として、また一個の教師として、いかなる意味においてか、一步を進め一事を識得したと自ら信じ得るごとに、それがわれわれ先人の生活において、既に已に徹底的に自覚され実現せられていたところであることを発見せざるはなかった。そして古人もかつてわれわれのごとく求め、われわれのごとく悩みつつ、ついにここに到達したものであることを思い、われわれの個性はかくして完成せられるものであるかという驚きと共に、今まであまりにも平凡かつ縁遠いものにししか見えなかった古人の生活が、実は最も普遍的な人間的体験と深い知恵の結晶であったろうことが会得されて来た。そして私は、ある時代のわれわれの祖先によって開拓せられた世界の深さと、またそれを根底としている伝統の確かさに比すべきものは、世界歴史の上にもそんなにしばしば現れるものではないことを信ずると共に、われわれの精神的祖国の存在を新たに感ぜざるを得ないものがある。

この文章に続いて、古人もわれわれも到達したのは「真理体得の唯一の道として残された「生涯稽古」の覚悟であり、更にこれを貫く行的精神の確立」であったと説明している。そして、そのための国語教育の方法を「行」の方法つまり行的方法に求めることにしたと述べる。それは、「単なる知識欲認識欲等によって成立するものではなく、生涯にわたる集中と持続とをもって一事に徹しようとする行の精神によってのみ確立せられる」と述べ、「維新後新たに移入せられた原理方法が、真理の認識において、人間の教育において、ついにその限界を示し、いっそう根源的なあるものが求められ来たった今、更に新たに何人もこの全人的鍛錬を基礎とする行的方法の深さ確かさを肯認せざるを得ないであろう」と、その意義を説いている。

以上が「序」に記された西尾の思考過程である。その経過をふまえて、『国語国文の教育』の冒頭は、この「行的方法」から書き起こされることになった。西尾は、僧堂教育、芸道教育、年期奉公の伝統教育に見られる「すべてを実践的に体得させ、全人的に把握させようとする行的認識」を原理とする行的方法に自らの教育の立場を確立したと言う。それは、「知的観念的認識を基礎とする現代教育とは著しい対照をなすものである」と述べ、行的認識の教育が行き詰った教育の現状を革新する力を持ったものであると説明している。そして、その行的方法による教育が生み出す力が生涯にわたるものとなることを次のように説明する。

行的認識の教育によっては、何よりもまず力の限りを出し切ることに
よって人間全体が鍛錬せられつつ、徐々にその可能性を高めゆき、つ
いにあらゆる認識作用を絶し、あらゆる方法を超えたところに、認識
以上、方法以上のものが全人的把握として体得せられる。ここに至っ
て、学問・技芸は単なる学問・技芸にあらずして、真の教育において
所期するとき渾然として働く主体的な力となるのである。この全力
を出し切ることによる人間鍛錬と、その上に時として獲得される主体
的飛躍とは、われわれ教育者の深く心に留むべき行的教育の一意義で
あって、この一事をいかなる場合、いかなる方法においてなり、真に
生徒に体感させることを得るならば、彼等の生涯にどれだけの力とな
り自信となるであろう。

こうして、「生涯稽古」へとつながる議論が展開されていく。さらに、「禪寺における食物調理掛である典座の心掛けを訓えて「絆（たすき）以て道心となす」といった」道元を紹介する。ここに、「行」によって生み出されたものを知恵として重んじる古人の姿があり、こうした道元の「知恵こそが生きて働く人間的な力であると信じ」ていたと説くのである。

次に、西尾は、行的認識は国語教材のあり方を考察する上でも重要であ

ることを示していく。これまで、国語科の教材は「ゆたかさ」ばかりが求められ、量的な増大は達成した。「童謡・童話を始め課外読物・補助読本等の激増によって、教育上に「ゆたかさ」の将来されたことは驚くべきものがある」と認めている。そして、「最近ようやく、児童の心性を鍛え、これに「たしかさ」を与えるべき要求が根ざして来た」けれども、その根底にある情意的確実さを把握させる教材が求められているとしている。

こうした「たしかな」教材によって、行的認識の原理を導入した教育をすすめるために、次のように説いている。

私は明治以来の教育を観念的認識の原理に立つものであると前言した。まず修身科においていろいろな徳目が教えられる。その目的は単なる道徳的知識の授与のみならず、情操の涵養にあるといわれるけれども、そのすべては読むこと、聞くことによる観念的認識にほかならぬ。これは、かく観念的認識によって思想感情を涵養して置けば、やがて実社会の人となった際にそれが実践せられるという期待の上に認容せられたものであるゆえに、この意味において、思想感情は実行実践の前提としてのみ位置づけられていたにすぎない。また科学方面の教科においても、まず原理原則を教えて後に実験させ、実業教科でも、同じく一般的知識を与えた後に実習させるという方法を出でなかった。すなわち実験実習の意義は、ただ原理原則の証明にあり応用にあつて、理解を深め記憶を確実ならしめて、他日実生活上に役立たしめる準備的訓練たるにすぎなかった。国語科においても、読方においては読ませる前に新出語句の辞書的意味がまず教授せられ、綴方においては模範文によってそれぞれ表現の原理方法等が観念的に授けられた後、その実習として読解させ、または綴らしめるという方法のみが行われていた。

西尾は「道徳的知識の授与」や「情操の涵養」を目的とした徳目教育、

実習読解の読方、模範文綴方を批判する。一つの形式に学習者の認識を流し込んでいく典型的な観念的教育であると評しているのである。

そして、このような明治以来の観念的認識の教育の反省から、新しい動きがあることを歓迎する。「綴方は模範文に頼らせないで直ちに児童自身の表現たらしめようとし、図画のごときも型や方法の観念授与から進まないで、直接児童の図画たらしめようとして来た。理科が実生活の間から問題を捕え、自由実験を重んじようとして来た」ことを「飲むべき傾向」と評価している。

つまり、「行的認識の原理を自覚し、これを基礎とした教育を実現すること」が明治以来の観念的認識に支配された教育から脱却する実践を生み出すことになるというのである。のちに西尾が打ち立てる話し言葉教育を中心にした「言語生活主義」は、この議論に根ざしている。

3. 「国文学と教養」の教養論

西尾が『国語国文の教育』で到達した国語教育学の立場は、「生涯稽古」へとつながる「行的認識」であった。そのことを前提にして、「国文学と教養」で示された彼の教養論を見ておきたい。

石井によると、『国語国文の教育』に収められた「国文学と教養」は、『国文学講座』第10冊「文学と教養」と第11冊「国語教育の意義」を一篇にまとめたものである。そのため、後半が国語教育論に比重のかかった叙述になっている。そのことは、西尾の教養論の特徴をよく示している。西尾が国語教育について言及する背景には、彼の教養論があるのである。

先にも見たように、西尾の国語教育は「生涯稽古」と「行的方法」を重視している。この行的認識の立場は、明治期に広く流布した修養論を思い起こさせる。しかし、西尾はそれと同義で使っているのであろうか。本節では、彼の「国文学と教養」を見ることで、西尾の立場が、明治期の修養論や大正、昭和前期の教養主義とも区別される独自の教養論であることを見ておきたい。

西尾の行的認識は「すべてを実践的に体得させ、全人的に把握させようとする」ものであった。そして、この原理を自覚して教材の選定や教育にあたることを求めている。彼がそのように言うのは、彼の文学に対する認識からきている。「国文学と教養」で、「全人格的な努力と精進とをもって、生活の深所から打ち出され鍛え出される」文学の世界では、和歌や俳諧などのように「創作する人は創作する人、これを鑑賞し批評する読者は読者」というような区別の存しないのがある時代の状態であった」と述べている。ところが、散文の世界では、作者と読者の区別が早くに成立した。そこで、作者と読者との明瞭な対立が生まれ、「国文学と教養の問題についての考察においても、制作と鑑賞との両側面からこれを試みなければならぬのが今日の当然事となって来た」と言う。つまり、西尾が説く行的認識は、作者と読者、制作と鑑賞という二側面からの考察に支えられた認識でなければならないということである。

次に行的認識の「行」について考えてみたい。西尾は、教養について次のように説明する。

教養の概念は、従来、常識的には、いわゆる簇として、様相を洗練し典雅ならしめる意味に用いられていた。しかるに近來往々新しい意識をもって用いられている場合には、修行修養の語が普通に狭い意味の宗教的道德的意義に限定されて、全人間性の要求を充たすものでなく、したがって美を求める心のさわやかさや、美を求める心の朗らかさを欠くものであるのに対して、そのすべてを含み、しかもその根底においては道念を中心とした心性の開拓淳化を意味することがある。しかしながら、真の教養の意義は、やはり様相において心性を拓き、心性によって様相を練る両者の統一でなければならぬ。すなわち様相洗練としていえば、衷なるものの姿としての様相洗練であり、また衷なるものの啓沃として考えれば、それは必ずや人格的具体的発現、すなわち行作たるべき衷なるものの啓沃でなければならぬ。

西尾は、まずこれまでの教養概念が「躰として、様相を洗練し典雅ならしめる意味で用いられていた」と説明する。これは、一人ひとりの内的な可能性を引き出し人格形成するという躰の意味であると理解できる。続いて、狭義の教養として、修行修養の語に示される宗教的・道徳的意義が言われるけれども、それは全人間性の要求を満たさないと、その限界を見る。西尾の脳裏に去来していたのは、おそらく明治後期の修養論であろう。

筒井清忠「近代日本における教養主義の成立」(『日本型「教養」の運命』所収)には、明治後期の修養運動が紹介されている。浄土真宗系の清沢満之『精神界』(明治34年)、キリスト教信者、網島梁川の「見神の実験」(明治37年)、西田天香の「一燈園」設立(明治38年)、蓮沼門三の「修養団」(明治39年)、田沢義鋪の青年団運動の開始(明治43年)、野間清治の「講談社設立」(明治44年)をあげて、「対象や方法は様々であったが、アノミ―状況への対応として「修養」を直接・間接に目的とする思想・運動がこの時期に多様な形で登場してきた」と、修養主義が運動の中から育ってきたことを示す。そして、明治40年代には、加藤咄堂『修養論』に代表される修養書ブームがあったことを紹介している。筒井は、この修養主義は「『人格の修養と云い、人格の向上と謂う。当世流行の通語なり』といわれたように、この時期の修養主義によって「人格」は初めて本格的に社会意識上重要視され、神聖化もされ始めたのである。修養がしきりに説かれたのだが、さらにその修養によって目指された目的は「人格の向上」なのであった。修養主義は人格主義といってもよかったのである」とまとめている。西尾は、この人格主義が「宗教的・道徳的意義に限定されて、全人間性の要求を充たすものでな」いとするのである。

さて、再び西尾の教養論に戻りたい。西尾は、こうした修養主義の限界を示した上で、真の教養の意義は、「様相において心性を拓き、心性によって様相を練る両者の統一」に求められ、その洗練は「衷なるものの姿としての様相洗練」であるとする。これは、自らの内面から生み出される心性に従い、更なる自らの心の可能性を拓くことが肝要であるということであ

る。行作をとおして心の底から必然的に湧き出されるものに導かれ、全人間性を啓くことでさらに豊かな内面を作り上げていくことが大切であると述べている。そして、この行作の繰り返しが教養ある人格を形成すると言うのである。

したがって、教養は何かを真似て蓄えるような皮相なものではないということ、を次の段落で述べる。

ゆえに教養の全き相は、人生の根本義を求め、既になにものかを握り得て、その充ちた精神が一作一行の上に流露し来たと共に、また日常の一作一行によって、更に精神そのものを精鍛錬摩してゆこうとすること、生活において見られるものである。かくて教養とは、あらゆる様相を裏なるものに集中することであると共に、またその裏なる焦点から発して種々の様相に示現させる作用であるともいうことが出来よう。しかし真に裏に得たものは、たとえこれを包もうとしても自ら流露し来たらずには止まないものであるけれども、教養がいったんその根本に集中する一面、すなわち裏なるものを開拓啓沃してゆく一面を忘れて、単に様相を洗練彫琢する方面に傾くならば、それは生命のない粉飾となり模倣となってしまう。なんといっても裏を開拓することが体であり、様相を洗練することは用であって、外形的訓練も裏なる道念なり真理の愛なりに生かされて、初めて人格的意義を得来たるものである。

西尾の教養論の核は、「裏なるものを開拓啓沃してゆく」ところにある。これを忘れ「単に様相を洗練彫琢する方面に傾くならば、それは生命のない粉飾となり模倣となってしまう」ことに注意を喚起している。内面を磨かずして、存在の可能性にばかり気をとられると、何かを真似てうわべを飾だけの皮相なものになるというのである。

このように見てくると、西尾の教養論は「裏なるものを開拓啓沃する」

実践論として理論構築されていることが分かってくる。『国語国文の教育』で示された「行」というのは、古人が求めた道の実践であったことを再度想起したい。しかも、それは和歌や俳諧のごとくに制作と鑑賞が一体となったものである。「行」はそうした道を舞台にした実践を重ねることで教養を「衷なるもの」として内面化する一連の過程であることが見えてくる。

ここでもう一度筒井清忠の論を見てみたい。筒井は、修養の一部であった教養が分離独立してくる様を第一高等学校の新渡戸稲造門下の安倍能成や和辻哲郎、阿部次郎に見ている。彼らは、魚住折蘆を介して網島梁川や西田天香らと交流を深める。新渡戸稲造の薫陶も受けてゲーテやミルトンにも興味を惹かれていく。筒井は、新渡戸が説いていた修養はすでに教養の意味であったとしている。こうして夏目漱石やケーベル博士の影響ばかりでなく、「大正教養主義は明治後期の修養主義から出立した」と述べる。

さらに、筒井は、「教養」という言葉と理念を「修養」から自立させて最初に使ったのは和辻哲郎であるとする。明治期に「教養」は「教育」educationと同義であったことを示して、「教養」が Bildung という意味で使われ出した嚆矢を探索調査したところ、和辻の「すべての芽を培え」（『中央公論』1917年4月号）であったと報告している。和辻は、その中で「「教養」とはさまざまな精神的の芽を培養することです」と述べて、「これはやがて人格の教養になります。そうして、その人が「真にあるはずの所へ」その人を連れて行きます。その人の生活のテーマをハッキリとさせ、その生活全体を一つの交響楽に仕上げて行きます。すべての進展や向上が、それから可能になって来るのです」と「教養」を説明している。

この和辻の教養論は、「あらゆる様相を衷なるものに集中することであると共に、またその衷なる焦点から発して種々の様相に示現させる作用である」という西尾の教養論と重なっていることに気づく。つまり、西尾は和辻らの大正教養主義の流れの中にいることがこれで明瞭になってくる。

それでは、散文のような文学での制作と鑑賞が分離した場合における「行」は、西尾の教養論ではどのように考えられているのであろうか。次

に、こうした教養と文学の関係についての西尾の言及を見ておきたい。

西尾は、文学の鑑賞が教養としての意義を持つ条件として、正しい理解を成立させる真の読書態度の確立が不可欠であると強調する。そして、「真に価値ある作品を正しく鑑賞し理解しようと努めるならば、むしろ文学こそ、教養的精神そのものの発現にほかならぬ」としている。その実例として、真・善・美、さらに聖の境界へと人間を高めていったルネッサンス期のギリシャ文芸への教養的憧憬、西行、宗祇、雪舟、利休に貫通する風雅の道を明らかにした芭蕉の鑑賞と制作態度を示している。

西尾は、芭蕉『笈の小文』の発端を引用しながら、芭蕉の風雅が彼の人生そのものであることを示し、文芸を鑑賞することは、彼の人生そのものの、内面化された思想を掴み取ることにあるという教養の意味を次のように説明している。

「西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の絵に於ける、利休の茶に於ける、その貫道するものは一なり。」といった後、

しかも風雅に於けるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る所、花にあらずといふ事なし。思ふ所、月にあらずといふことなし。像、花にあらざる時は夷狄に等し。心、月にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出で、鳥獸を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり。

と道破した精神は、教養としての文学がいかなる意義において成立し、いかなる位置を占むべきであるかを示して余蘊なしというべきであろう。彼の風雅は手のさき口の端でもてあそぶような手軽なものではなかった。

西尾は、こうした考察の末に、教養は「社会に立つ場合になんらかの特権を得たいがために求められる外的な資格や装飾の一種にすぎない」とする考えを退け、「自己の霊性のために第一義のものを握ろうとする努力精進を根底とするものである以上、その人が真に求める人であればあるほど、その過程として、向上のある時期において必ず一度は、人間の社会に行わ

れるあらゆる事象に対する興味を失って、既成の道徳も宗教も文学もなんらの権威を有しなくなるであろう」と、自らの心性に深く根ざした教養を得ようとすればするほど、こうした煩悶は深刻になるのだと説いている。そして、「文学なにもものぞ、芸術なにもものぞ、哲学なにもものぞ。第一義諦を求める熱い道心からすれば、すべては道草であり、遊戯であり、生命に触れるところのないものである。そしてこれを捨て、これを超えるところのみ第一義への迫進は得られるように思われる」と文学を鑑賞して教養として内面化する姿勢を明らかにするのである。

そして、文学の制作と鑑賞という二面における教養の意義について、次のようにまとめている。

かくて文学の人間的教養における意義は、その素材その思想において、人生そのものと広さを等しくし、その観照において、宗教そのものと深さを等しくする。しかして鑑賞においては、ただ真に価値ある作品を選び、正しい理解を基礎とすることによってのみこれが得られ、また制作においては、不断の集中と精進によってのみこれが到達せられるのである。教養としての文学の本質は、多作し広く涉獵することによって得られるものではなく、すぐれた一つを制作し、または鑑賞し尽くすことによって充たされるものであることを考えなくてはならぬ。

西尾は、多くの文学を掻き集めるようにして鑑賞することや作品を多作することに意義を見出さない。何かを多く知っている、何かを多く学んだというような地点に教養の意義があるのではないことを、制作と鑑賞という二方面の実践的な見地から説いているのである。ここに西尾の教養論の独自性がある。修養主義から出立した教養主義の潮流に位置づきながらも、さらに制作と鑑賞という実践論を加えた新しい独自の教養論となっているのである。

4. 旧制中学校国語漢文科用教科書『国語』発刊の意義

旧制中学校国語漢文科用教科書『国語』は、「国語」という単独の名称で中等国語教育史上に登場してきた。従来の国語教科書は『国文読本』『国語読本』『中等国語教科書』『中等国文教科書』などの名称であった。1943(昭和18)年の文部省発行の国定教科書でも『中等国文』という名称であったことを考えると、自らが編集した教科書に『国語』という名称を公然と使用するだけの意味を西尾は自負していた。その後、『国語』の影響もあり、中等国語教科書の世界でも『新制国語』『国文』という名称も見られるようになる。『国語』の登場によって、日本の国語教育における教材観は革新されたのである。

『国語』全十巻には、小説、童話、詩、短歌、紀行文、日記、書簡、評論、劇脚本、歌舞伎、浄瑠璃、読本、俳文、法語などが採られ、明治から昭和にかけての優れた作品が並べられている。さらに学年進行につれて古典の比重が増す構成をとっている。さらに、各地の国語教室での便宜を図るため『国語 学習指導の研究』も発行している。また、「編集室と教室との連絡機関」として『国語 特報』も刊行して、全国の国語教育者との交流を進めていった。⁽⁶⁾

『国語』の評判は高く、全国の大半の学校で使用されたという報告もある。⁽⁷⁾『国語 特報』では、1937(昭和12)年度には408校、1938(昭和14)年度には617校で採用されたと記録されている。

『国語』には、西尾実の書いた文章が無署名で三篇収められている。巻一の巻頭「生きた言葉」、巻五の巻末「ツェッペリン伯号を迎えて」、巻十の巻末「生涯稽古」である。編集者の意図を明瞭にするために全十巻の要所に自らの文章を配するという編集姿勢であった。当時の教科書としては珍しい編集であったが、そこにも編集者たちの熱意が感じられるのである。

西尾が書いたそれぞれの文章は、『国語国文の教育』に示された彼の国語教育論がにじみ出ている。

巻一の「生きた言葉」では、挨拶を欠礼した新入生が、自分の非を認めて挨拶し直した話を紹介している。そして、道元の「向かひて愛語をきくは面をよろこばしめ、心を楽しくす」という言葉を引いて次のように締めくくっている。

国語の学習に於ては、論文も随筆も小説も読まなくてはならぬ。歌も句も詩も読まなくてはならぬ。文も綴らなくてはならぬ。しかしそれだけで、談話や問答や挨拶のやうな、日常の言葉の鍛錬を疎にしたならば、その学習は、根のない植物を育てようとするのと等しく、決して真の国語力の成長を結果することは出来ないであらう。

我々は何よりもまづ我々自身の言葉を生きた言葉たらしめることによつて、我々の心を拓きいのちを向上させなくてはならぬ。そしてそれが、文を綴り、文を読む真の基礎であることを自覚しなくてはならぬ。

これは、彼の教養論の中核をなす「行作たるべき衷なるもの」そのものである。彼は、ここに国語力の基礎を置く。

次に、巻五「ツェッペリン伯号を迎へて」は、莫大な賠償金で苦境に立たされていたドイツで、若い企業家たちが活躍する話題をもとにしている。ツェッペリン伯号が日本上空に飛来した際に科学者エッケナー博士が語った言葉に感動して、日本文化建設のための国民の奮起を求めた文章である。ドイツが困難を克服している現状を紹介したあとに、次のように述べている。

翻つてわが国の現状はどうであらうか。見方によつては、ドイツ国民にも劣らぬ難局に当面してゐる吾々国民に、果してドイツ国民だけの覚悟があるであらうか。人間の力、意志の力について、吾々は幾何の自覚をもち、如何なる工夫をなしつゝあるであらうか。国民の、わ

けても青年の関心は、寧ろ、より多く感覺的快適に向かつてゐるので
はなからうか。個人の生活に於ても、社会生活に於ても、感覺的快適
を目標とするのは、既に精神的衰頹の標徴であるといはれてゐる。歴
史は古くても、日本の文化はまだ稚い。過去の二千六百年は、日本民
族にとつては、世界に於ける先進文化を摂取すべき、いはば学習時代・
準備時代であつたともいへよう。真の日本文化の建設はこれからでな
ければならぬ。随つて、既に老衰期に入つた国々の文化が感覺的快適
を中心としてゐるからといつて、吾々が今それに追隨し、それを以て
新時代の誇であるかの如く考へるのは大なる誤でなくてはならない。
吾々は人間の力に目覚め、意志の力を以て立つことによつてのみ、歴
史的に課せられてゐるこの重大な責務を遂行することが出来る。意志
の力に目覚める時、国民も、社会も、永遠に若く、清新であり得る。

ツェッペリン号が世界一周旅行の途次に日本に飛来したのは1928（昭和
3）年のことであつた。西尾は、身近な出来事を話題に日本文化の新しい
展開を期待した文章を『国語』に掲載した。しかし、1930年代半ばの日本
の状況を考慮に入れると、この文章は国威発揚に符合する内容を持ったも
のとして評価せざるを得ない。飛行船のツェッペリン社がナチスと犬猿の
仲であり、その後同社がナチスによって国有化されたという事実は正確に
見る必要がある。しかし、こうした話題を日本とドイツという若い国の問
題として扱うところに、当時の西尾の限界がある。⁽⁸⁾

三篇目の巻十「生涯稽古」は、世阿弥の「生涯稽古」を紹介した文章で
ある。既に見たように、「生涯稽古」は西尾の教養論の中心に位置づいてい
る。世阿弥の能楽論の基底である「稽古論」、花伝書の「非道行ずべからず」
の一句を示して、一道集中の精神に学び、次のように述べている。

彼にあつては、かく、横に生活の全面に亘る稽古は更に又、縦に全
生涯に通ずる稽古でなければならなかつた。「花伝書」の第一に置かれ

てゐる「年来稽古條々」はこれを説いたもので、その量からいへば僅かに数頁の小篇に過ぎないけれども、これを熟読玩味すれば、言々、一道の奥に達した人の深い経験と自覚の披瀝であつて、単に能役者に対する適切な指針たるのみならず、真に人生を生きようする者への意義深い案内書でもある。

そして、「彼の稽古は、その実践に於て、一道集中の精神を以て全生活・全生涯を規定するものであると共に、その心術に於ても」「自己の芸の進路に、常により高い芸位を見出してこれを新なる稽古の対象となし、それに対する初心者としての謙虚さと新しい意欲とを以て、不斷の発展に向かはんとするものである」と世阿弥の姿勢を見た上で、次のように最後を結んでいる。

彼が同じ「奥段」に、

命には終あり、能には果あるべからず。

といつてゐるのは、かくの如き精進の究る所に発せられた、道の無限に実参し得た人の深い歎に外ならぬ。世阿弥の如きは、真に一道に徹することによつて普遍そのものに接し、永遠そのものに参し得た、選ばれた人々の一人であつたといふべきであらう。

これらの文章に綴られた核心は、西尾が『国語国文の教育』で明らかにした生涯稽古と行的認識の体系そのものである。西尾にとって『国語』は彼の行的方法そのものであったことがよく分かる。

5. 西尾実の教材論に見る「文芸性と国家性」

『国語 特報』第二号には、京都帝国大学教授、文学博士である田辺元が、「新人文主義（ネオヒウマニズム）」と賞賛した「岩波「国語」の特色」を寄稿している。⁽⁹⁾

従来の陳套が一掃せられて清新の氣溢れ、浅薄なる教訓は影を潜めて、代りに真の「日本的」なる生命が力強く脈打つ。古きものと新しきものとを通じて、如何に多くの美がにじみ出て、如何に高き真実が語られて居るであらう。それは、民族の個性を無視し、歴史を忘れて抽象的普遍の価値を追究せんとした古き人文主義でなくして、飽くまで民族の個性とその歴史とを重んじ、真に独自なる国民性こそ具体的に普遍の価値を有すると信ずる新人文主義を、その編纂方針とする。

田辺は、「民族の個性」「国民性」の価値を持つ「新人文主義」の教科書であると規定した。美・真実・歴史という評価軸から見ると、田辺の言う「古き人文主義」も「新人文主義」も、ともに同じ「教養主義」の根から出ていることは、これまでの議論で明らかである。田辺は、西尾の教養論の他の教養主義者と分かつ独自性を評価している。しかし、すでに見たように、西尾の教養論の特質は、行作をとおして衷なるものを開拓する実践性にあったのである。その西尾の議論が「民族の個性」「独自なる国民性」という用語に収束されたとき、実践的教養論に裏打ちされるはずであった彼の教材論の独自性は消去されることになる。

岩波書店が掲げた「本書の綱領と特色」⁽¹⁰⁾には、「▽現実日本の認識に立脚し、当来日本の建設を目標とした指導精神の確立。▽国家的民族的自覚を中心とした人間教育資料の集成。▽国語教育に於ける文芸性と国家性との本質的定位に成る編集体系の樹立。▽国語教育に於ける新領域開拓としての「言語活動」の確認。▽原文尊重と教育的統一とを期した良心的編纂の実現。▽理論と実践の統一に成る懇切精到なる教授参考書の完備」を掲げている。この文言にも編者西尾実の教育観がにじみ出ている。特に「国語教育に於ける文芸性と国家性と本質的定位に成る編集体系の樹立」は、西尾の国語教材観をよく示している。

西尾は、「国語教材における文芸性と国家性」⁽¹¹⁾で、当時の状況下での教材観を示す。「大正年代の国語教科書において文芸性が時代的特質であった」

のは、「その年代の文芸の性質」と「文芸が同代の文化なり社会なりにおいて占めていた意義と位置」によると言う。同じように「昭和年代の国語教科書が国家性・民族性を中心として編纂せられるようになって来た」のは、「現代における国際的・国内的な社会情勢を反映したもの」であると説明している。

国語教科書は、一面において、かく時代に即して編纂されることが必要であり、また自然である。けれども、それがあくまで国語教科書たる独自性において時代に即することは、国語教育上更に重要事であってはならぬ。ここにその国語教科書が、真に国語教科書たり得るか否かの決定点があるともいえよう。この意味において、文芸中心から国家性・民族性中心への推移をいかに定位し、国家性・民族性をいかに国語的独自性において実現するか、換言すれば、国語教材における文芸性及び国家性・民族性にいかなる意義と位置とを与えるか、これが現代における国語教科書編纂の根本問題でなければならぬ。

「国家」や「民族」の文字が躍り出る時代にあった教科書編纂という西尾の発言は、これまで見てきたような西尾の教養観とは別の文脈に支配された教材観のように映って見える。続けて、西尾は文芸性と国家性の対立を次のように説明する。

国語教科書の編纂精神としての文芸性と国家性・民族性は、時として対立する二つの性質であり、要素であるかのように取り扱われていた。そういう場合の文芸性は主として享楽的趣味として理解せられ、国家性・民族性は主として道徳的規範として理解せられたものであったといってよい。文芸性が趣味性として考えられ、国家性・民族性が道徳性として考えられるということは、それぞれの性質をそれぞれの著しい特質においてとらえた理解の仕方に相違ないけれども、現代に

おける国語教科書の編纂精神としては、これに対して更に厳密な批判が必要であろう。

そして、文芸性と国家性の根拠を「新教授要目」に求めている。

すなわち国語教材としての文芸性は新教授要目に示されているように、一面には国民道徳性・常識性と対すべき趣味性であると共に、一面には国語教材の一般的規定である「文章ノ模範タルモノ」すなわち言語的表現の性質でなければならぬ。かく考えると、趣味性としての文芸性は国語教材としての一要素であるが、表現性としての文芸性は国語教材のすべてを規定する条件でなければならぬ。

また国語教材としての国家性・民族性は、これまた新教授要目が示すように、「健全ナル思想，純莫ナル国民性ヲ涵養スル」指導精神としての要素でなければならぬ。

この意味において、国語教材における文芸性は表現の性質としてあらゆる教材にもたる一般的・基礎的な規定であり、国家性・民族性は指導精神の問題として指導体系の中核をなすものでなくてはならぬ。したがって表現の立場からいえば、国家性・民族性は素材としての事象性・思想性であり、指導精神の立場からいえば、文芸性は表現様式の性質にほかならぬ。

「国家性・民族性は素材としての事象性・思想性」であり、「文芸性は表現様式の性質」であるとして「新教授要目」との整合性を図ろうとしている。ここに、西尾の実践的教養論と徳目的教材論との乖離、矛盾が生まれることになった。岩波『国語』の二面性は、ここに端を発している。しかし、西尾の教材論は突然発せられたものではないことも見ておく必要がある。小国喜弘「国語教育における「言語活動主義」の成立～西尾実「日本語の前線と銃後」⁽¹²⁾」は、西尾が1942（昭和17）年に書いた「日本語の前線

と銃後」という文章を手がかりに、西尾の「言語活動主義」の成立過程に潜む問題点を指摘している。小国は、西尾の「言語活動主義」は、「前線」での日本語教育、「銃後」での国語教育の体験から定立されたものであり、「大戦下の時代状況にふさわしい議論として提示された」と述べている。

西尾が「言語活動主義」へと論を進める前史が『国語国文の教育』である。これまで見てきたように『国語国文の教育』に示された行的認識やそれによる教養論は、自己の内面の深化を追い求める議論であった。その議論の意義はすでに見たとおりである。しかし、その一方で、この西尾の行的認識が自己の内面へと限りなく向かう議論であることを自覚しないと、結局は自己と関わる他者を見失うことになっていく危険性が潜んでいることを見ておく必要がある。自己の内面への凝視だけに拘泥しているうちに、自らの立脚点が見失われ、その間隙に「国家」や「民族」という他者からの優位や隔絶の議論を誘発しやすい論理が入り込むと、「衷なるもの」をとにも求める存在である他者が消えていく。実践論としての意義を有した行的認識、教養論も、他者の存在を見失うとき、その意義をも失うことになる。それは、文学の問題として考えれば、文学が絶対視され、文学の効用が説かれる至上主義へと舞い戻ることでもある。

西尾は、姉妹編『国語女子用』を1938（昭和13）年に刊行した。しかし、文部省による『国体の本義』発行に象徴される国民精神総動員の時代であった。伝統的な自由発行検定制による中等学校教科書の刊行は困難になり、1943（昭和18）年からは国定教科書『中等国文』のみの国語教育が行われた。

注

- (1) 岩波編集部編『国語』岩波書店、1934（昭和9）年8月初版。全十巻。昭和9年12月に文部省検定済とされた。
- (2) 西尾実『国語国文の教育』古今書院、1929（昭和4）年11月。本稿での引用は、『西尾実国語教育全集』第一巻（教育出版、1974年10月）による。尚、『国語国文の教育』は、1938（昭和13）年1月に改版13版を出している。また、上記全集収録の底本は

1965(昭和40)年11月発行の第14版である。

- (3) 筒井清忠『日本型「教養」の運命』岩波書店、1995(平成7)年5月。
- (4) 『国文学講座』文献書院、1928年1月～12月。
- (5) 石井庄司「西尾実『国語国文の教育』の成立とその意義」『近代国語教育論史』。初出は、「学苑」第492号(昭和女子大学、1980年12月)である。引用は、『近代国語教育論史』によった。
- (6) 安良岡康作『西尾実の生涯と学問』(三元社、2002年9月)は、『国語』編集の苦心を語っている。当時の教科書の編集の大変さが分かる記述である。長文であるが、西尾の教養論、行的認識に基づいた実践論を理解するうえで貴重であるので、該当部分を引用しておく。

最初は一年計画で完了すべく着手した編輯は、長田幹雄が実と西島九州男とに相談して、昭和八年発売の予定を一年延期することにした。結局、たっぷり三年かかってしまった。教科書の書名については、関係者が協議し、提案し合った時、岩波雄が『国語』が一番ふさわしいと言ったことで、衆議が一決した。教科書の表紙に貼る題籤の「国語 巻一」などや、内題の「岩波編輯部編 国語 岩波書店刊」は、岩波書店刊行の『漱石全集』『露伴全集』などの背文字を揮毫した、能書の狩野亨吉に依頼することになった。また、教科書の表表紙・裏表紙には、帝国博物館に請うて、正倉院御物の「碧地狩獵文錦」を複写したものをいえることになった。用紙は一番上質なものを選び、和装本の綴じ糸は綿糸を使い、定価も打算を度外視して、数ある教科書中、最低の値段にしようとした。こうした経過を辿って、『国語』の編輯・校正・出版はじりじりと、休むことなく進捗して行った。そのうちに、全十巻の印刷・校正のために、編集部・校正部の部員が印刷所の精興社の青梅工場に出張することになり、実も、続出する問題解決のために、一週間ほど出張して、青梅の旅館の一室に宿泊することになった。そのころ勤務していた東京女子大学の講義には、岩波書店が世話してくれた自動車に通いつつ、編輯や校正上の相談に応じた。一行は、季節が夏のことなので、午前七時に工場に行き、午後十一時まで働かなくてはならぬような非常時の態勢で仕事を進めた。晩酌党の長田幹雄は、「この校正が済んでしまったら飲もうね」と、夕食の度ごとに、自分に言い聞かせるように言って、仲間を慰めていた。長田は、また、旅館と工場の間だけでも歩きたいという部員があると、「そんな贅沢は言うな。一週間だけだ」とはっきり言って、自動車往復を強制していた。実は、『文学』の編輯にも、『国語』教科書の作製にも、岩波書店内のきびしい勤務意欲の現れを経験した。(中略)岩波雄は、昭和十年一月十七日の『東京朝日新聞』朝刊の第一面最上欄に、三段にわたって、「所信を明かにす ―国語教科書の出版に際して―」と題する一文を公表し、その後半に、「今玄に公にするのは、斯道の權威に囑して成れる中学校用国語教科書である。本書は精到なる学理と實際教育の体験とを基礎とした独自の体系に成れるものであり、体裁の高雅、

印刷の鮮明，製本の堅牢，価格の低下と相俟つて，十分所期の成績を挙げ得たものと確信する。／尚その普及に就いては，不祥事件の歴史に鑑み，あくまで公明なる手段と真摯なる努力を以て，その本質的価値を直ちに教育者諸賢の識見と良心に訴へんとするものである。教科書編纂に於ける諸種の制限あるにも拘らず，幾多特色を発揮することに細微に互つて苦心を重ねたる本教科書に対して，徹底せる審査と厳正なる批判とを寄せられんことは，私の切望して止まざる所である」と表明している。これは，全く前例を見ない，堂々たる革新的広告文であったと言えよう。多くの反響が発行書店に寄せられた。

- (7) 井上敏夫編『国語教育史資料第二巻 教科書史』東京法令出版，1981(昭和56)年4月。
- (8) 「ツェッペリン伯号を迎えて」は，1937(昭和12)年の改訂版で書き下ろし教材「日本の魔法鏡」に差し替えられた。「日本の魔法鏡」は，自己鍛錬と現代科学との総合による日本文化の創造を主題にした西尾の文章である。差し替えられた経緯は詳らかではない。しかし，「ツェッペリン伯号を迎えて」の持つ露骨な国家性は，西尾の教養論とは距離があることを本人が自覚したのではないかと想像される。
- (9) 田辺元「岩波「国語」の特色」岩波書店「国語」パンフレットにも使われた。
- (10) 岩波書店「本書の綱領と特色」岩波書店「国語」パンフレット裏表紙。
- (11) 西尾実「国語教材における文芸性と国家性」『国語 特報』1，1935(昭和10)年1月，岩波書店。引用は，『西尾実国語教育全集』第二巻，教育出版，昭和49年12月，300～302頁。
- (12) 小国喜弘「国語教育における「言語活動主義」の成立～西尾実「日本語の前線と銃後」『人文学報，教育学』41巻，首都大学東京，2006年3月，13～37頁。